

音楽堂ヘリテージ・コンサート Ongakudo Heritage Concert

アンサンブル・アンテルコンタンポラン



日時 2021年8月29日(日) 15:00 開始 (14:30 開場)

会場 神奈川県立音楽堂

出演 アンサンブル・アンテルコンタンポラン

Ensemble intercontemporain

音楽監督・指揮：マティアス・ピンチャー

Matthias Pintscher, music director, conductor

主催：神奈川県立音楽堂

お問合せ：〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘 9-2

TEL 045-263-2567 (10:00~17:00 月曜休)

担当：業務課 塩野尚子 shiono@kanagawa-af.org

*主催公演に合わせて JR 桜木町駅から無料シャトルバス運行

*音楽堂ヘリテージ・コンサート特設サイト

公演概要

公演名 音楽堂ヘリテージ・コンサート アンサンブル・アンテルコンタンポラン

日時 2021年8月29日(日) 15:00 開演 (14:30 開場)

会場 神奈川県立音楽堂

出演 アンサンブル・アンテルコンタンポラン Ensemble intercontemporain

音楽監督・指揮：マティアス・ピンチャー Matthias Pintscher, music director, conductor

プログラム

ジェラルド・グリセイ：2つのバスドラムのための「石碑」

Gérard GRISEY, Stèle, pour deux grosses caisses (1995) * Gilles Durot & Samuel Favre, percussion

アンナ・ソルヴァルスドットイル：Hrím（霜）

Anna Thorvaldsdottir, Hrím, for ensemble (2010)

ジェルジ・リゲティ：13人の器楽奏者のための室内協奏曲

György Ligeti, Concerto de chambre, for thirteen instrumentalists (1969-70)

ピエール・ブーレーズ：アンセム 1（無伴奏ヴァイオリンのための）

Pierre Boulez, Anthèmes 1, for violin (1991) ** Jeanne-Marie Conquer, violin, EIC soloist

一柳慧：室内交響曲「タイム・カレント」

Toshi Ichiyanagi, Symphony for chamber orchestra "Time Current" (1986)

ミケル・ウルキーザ：さえずる鳥たちとふりかえるフクロウ

Mikel Urquiza, Oiseaux gazouillants et hibou qui se retourne, for ensemble (2020)

[曲目は5月30日現在のもの]

* 当初発表曲から一部曲目および曲順が変更になりました。今後もやむを得ない事情により変更になる場合があります。

世界最高の現代音楽集団 EIC の煌きを音楽堂で聴く！

音楽堂でアンサンブル・アンテルコンタンポランを聴く。これほど刺激的な体験があるだろうか？

intercontemporain = 同時代の中心で／交信する、というネーミングの通り、あらゆる楽器編成に柔軟に対応して、くっきりと時代の真っ芯を通す柱のように存在し、いまここで時代が呼ぶ音楽を自在に実現する、世界最高の現代音楽集団がアンサンブル・アンテルコンタンポラン（以下 EIC）だ。

20世紀を代表する指揮者、作曲家だったピエール・ブーレーズは、1970年当時のフランス大統領、ジョルジュ・ポンピドーから、戦後、ドイツに芸術の最先端の株を奪われかけていたフランスで、パリ中心部にのちに燦然と輝く現代芸術の砦、ポンピドー・センターと、そこに付属する現代音楽センター（のちの IRCAM）を創る構想を聞いた。そして、そこで活躍し、新しい音楽のアイデアを人々の目の前で実現してみせるクリエイティビティに満ちた常駐の音楽家集団が必要と考え、31名の傑出した音楽家たちを集めた。そのメンバー一人一人がソリストであり、歴代のメンバーにはかつて在籍したピアニストのロラン＝エマールやチェリストのジャン・キアン・ケラスなど、錚々たる名が連なる。EIC に在籍した、ということはそれだけでその音楽家が強靱な演奏力と鋭い知性、卓越した音楽性を持っていることの証になるのだ。

同時代が呼ぶ生き生きとした音楽表現、モダニストたちのスピリットが鮮やかに立ち現れる。

EIC は世界にあまたある現代音楽アンサンブルの最高峰だ。ベリオやリゲティ、クセナキスなどの作品を20世紀の「クラシック作品」としてとりあげるかと思えば、たった今生まれた新作も同じように力強く表現する。1400曲を超えるというレパートリーの全てに共通するのは、彼らの驚異的な力にかかると、どの曲も鮮やかに、生き生きと、格調高く、美しく魅力的な命をもって動き出すということだ。

彼らが活動を開始した当時のパリでは、音楽堂を設計した前川國男の師である建築の世界三大巨匠の一人、ル・コルビュジエらのモダニズム建築の保護運動も世界に先んじて始まっていた。評価の定まった歴史的な作品だけでなく、作家が生きている同時代の優れた建築や表現も、未来へ残すべき貴重な遺産である、という確固たる信念、芸術への揺るがない審美眼を確立したパリは、鮮やかにふたたび世界の芸術の首都として蘇った。

EIC は音楽堂のための特別なプログラムを用意している。パリに学んだ前川が、日本で最初の公立の音楽専用ホールとして設計したモダニズム建築を、どのように鳴らし、輝かせるだろうか。是非、音楽堂で彼らの目の覚めるような音楽を全身で浴び、湧き上がるような喜びを覚えて欲しい。[神奈川県立音楽堂]

[音楽堂ヘリテージ・コンサート特設サイト](#) EIC 演奏動画も多数ご覧いただけます！

究極の中途半端が炸裂させるモダニズム

沼野雄司

1976 年。パリでひとつの現代音楽アンサンブルが誕生した。仕掛け人は、20 世紀の現代音楽界を代表する知性、ピエール・ブーレーズ。彼が目論んだのは、「室内楽」と「オーケストラ」という二極の中間で、どちらにでも対応できる精鋭たちによる演奏団体を作ることだった。

実に中途半端なサイズ。しかし、時には1人で3人分の力を発揮し、時には3人が1人のようにふるまいながら、この団体は音楽史の新しいページを次々に開拓していった。現在にいたるまで次々に設立されることになる「現代音楽アンサンブル」の草分けにして最高峰、それがアンサンブル・アンテルコンタンポランだ。

音楽におけるモダニズムの究極を体現するこの団体が、この夏、横浜に上陸する。奇しくも場所は、日本のモダニズム建築を代表するホール、神奈川県立音楽堂。ちなみにもうひとつ、面白い符号がある。この音楽堂、座席数が1,054 席、すなわち大ホールでも小ホールでもない、中途半端なサイズなのだ。中途半端とモダニズム。とてつもないケミストリーの予感がするではないか。

曲目が実に刺激的だ。創立者ブーレーズ、怪人リゲティ、スペクトル王グリゼイ、日本が誇る一柳慧、そしてアンテルコンタンポランが強く推薦する若手二人。彼らが書いた、このアンサンブルのための音楽が8月 29 日、音楽堂で炸裂する。あとは我々が目撃するだけだ。

チケット 全席指定・税込み

S 席 4,000 円 A 席 3,500 円 シルバー 3,500 円 (65 歳以上) U24 2,000 円 (24 歳以下)

高校生以下 0 円 (枚数限定/要事前予約/引き取り方法により手数料がかかる場合があります)

車椅子 (S 席) 4,000 円 (付添席 1 名無料)

◎お得な音楽堂ヘリテージ・コンサート セット券 好評発売中

チケットかながわ <https://www.kanagawa-arts.or.jp/tc/> **0570-015-415** (10:00~18:00)

窓口 神奈川県立音楽堂窓口 (13:00~17:00 月曜休)

神奈川県民ホール窓口 (10:00~18:00) **KAAT 神奈川芸術劇場窓口** (10:00~18:00)

チケットぴあ <https://t.pia.jp> **0570-02-9999** [Pコード: 196-545]

イープラス <https://eplus.jp> **ローソンチケット** <https://l-tike.com> [Lコード: 31604]

主催: 神奈川県立音楽堂 (公益財団法人神奈川芸術文化財団)

後援: 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ パリ本部

協力・共同招聘: [サントリーホール](#)/[水戸芸術館](#) *リンク先よりそれぞれの公演情報をご確認いただけます

プロフィール

アンサンブル・アンテルコンタンポラン Ensemble intercontemporain



アンサンブル・アンテルコンタンポランは、1976 年、ピエール・ブーレーズが、当時の文化大臣、ミシェル・ギー、著名な芸術支援者ニコラス・スノーマンの協働と支援を受けて設立した「ソリストたちのアンサンブル」である。アンサンブルの 31 人のメンバーは全員がソリストとしての優れた力量と活動実績を持ち、20~21 世紀の音楽への情熱を共有している。メンバーは恒久的な契約で雇用され、アンサンブルの主要な目的である若い音楽家や一般の聴衆のための演奏、そして新しい音楽の創造、教育活動に携わっている。現代を代表する作曲家の一人である、音楽監督、マティアス・ピンチャーの芸術的指導の下、作曲家と緊密に協力し、楽器演奏の技術を徹底して探求する一方、さらに音楽、ダンス、演劇、映画、ビデオ、視覚芸術と連携したプロジェクトを開発している。アンサンブル・アンテ

ルコンテンポランは、フランス国立音響音楽研究所 IRCAM と共同で、合成音の生成の分野でも活躍している。一部の作品は、パリ市長財団の支援を受け、定期的に新しい作品への委嘱と発表が行われている。さらにアンサンブル・アンテルコンタンポランは子ども向けのコンサート、学生向けのクリエイティブワークショップにも取り組んでおり、未来の演奏家、指揮者、作曲家向けのトレーニングプログラムなど、音楽教育に重点を置いていることでも知られている。フランス政府文化通信省、パリ市議会から資金提供と支援を受け、シテ・ドゥ・ラ・ムジーク-フィルハーモニー・ド・パリを本拠地に、フランス国内外で演奏と録音を行い、世界中の主要なフェスティバルに参加する、フランスを代表するアンサンブルである。

オフィシャルサイト <https://www.ensembleintercontemporain.com/>

マティアス・ピンチャー（音楽監督・指揮）Matthias Pintscher, music director, conductor



ドイツ出身の作曲家、指揮者、教育者。20代前半で作曲家として頭角を現す。アンサンブル・アンテルコンタンポラン（以下、EIC）の音楽監督に就任した2013年前後から指揮活動を本格化させ、世界各地のオーケストラを指揮、若手音楽家の教育にも携わる。40代にして「第二のブルーース」（ル・モンド紙）と評されたピンチャーが展開する多角的で国際的な活動は、世界の音楽界の注目を集めている。

1971年、ノルトラインヴェストファーレン州のマールに生まれ、ピアノ、打楽器、ヴァイオリン、指揮を学ぶ。オーケストラの響きに魅力を見出し、地元のユース・オーケストラを指揮。89年、デトモルト音楽大学でギーゼルヘア・クレベに、92～94年にはデュッセルドルフ・ロベルト・シューマン音楽大学でマンフレート・トロヤーンに作曲を師事した。91年と92年にはハンス・ヴェルナー・ヘンツェによって、モンテプルチャーノ音楽祭に招待されている。99年、『エロディアド断章』がクリスティーネ・シェーファーとアバド指揮ベルリン・フィルによって初演される。同年にKAİROSから発売された管弦楽作品集のCDはドイツ国外でも高く評価され、前年にはザクセン州立歌劇場で初のオペラ『トーマス・チャタートン』が初演されるなど、20代の間に作曲家としての地歩を築いた。

指揮者としての実質的なデビューは94年、自作のムジークテアター『ひびの入った鐘』の初演（ベルリン州立歌劇場）である。2008年にニューヨークに居を移してからは、クリーヴランド管弦楽団などで自作を含む同時代の作品を指揮。13年にブルーースによってEICの音楽監督に任命されて以降、同団体に加えて欧米・オーストラリアの数々のオーケストラに客演し、16～18年にはルツェルン・フェスティバル・アカデミーの首席指揮者を務めた。古典派から現代に至る広範なレパートリーを手がけるが、近年はオペラにも取り組む。19年にウィーン国立歌劇場でオルガ・ノイヴィルトの話題作『オーランドー』（世界初演）、20年12月にはベルリン州立歌劇場でワグナー『ローエングリン』を指揮するなど、存命の作曲家兼指揮者としてホリガー、エトヴェシュ、サロネンに匹敵する存在となりつつある。

作品には3つの源流が見出される。1990年代のアルテュール・ランボーの詩に依拠する一連の作品では、緊張の持続のなかで、内省と情動があるいは交替しあるいは一体となる。その試みは2004年にパリ・オペラ座バステューで初演されたムジークテアター、『最後の空間 [レスパス・デルニエ]』に結実した。同時代の視覚芸術に着想を得た2000年代の作品としては、サイ・トゥオンブリーの絵画『ヴェール論』にもとづく弦楽器のための『ヴェール論習作 I～IV』（04～09）が挙げられる。一聴するとモノクロームの静的な音楽だが、耳を凝らすと元の絵画にも似た、発音と余韻の無限とも思われるニュアンスを感じ取れる。準備と集中の末に一瞬で書かれ固定される、日本の書の内息にもピンチャーは触発されたという。2本のトランペットとオーケストラのための『星々の落下』（12）は、アンゼルム・キーファーが描いた同名の巨大な絵画のマチエール（画面の質感）を、従来の劇的な対比と上記の多彩なニュアンスを組み合わせることで、まざまざと再現する。30歳ごろからユダヤ系の出自とコスモポリタン性を自覚してきたピンチャーは近年、ユダヤの文化にも着想を見出している。大アンサンブルのための『初めに [ベレシート]』（11～12）は、『星々の落下』の音世界を基調としながらも、打楽器を効果的に用いた明晰かつ力強い響きを探りいれて、世界の始原に伴う混沌を描きだす。指揮者としての経験が、音響の設計に役立っていることは間違いない。

これまでに、ルツェルン音楽祭を含む10の団体のコンポーザー（アーティスト）・イン・レジデンス、ミュンヘン音楽演劇大学作曲科（07～09）、ニューヨーク大学作曲科（10～11）、ジュリアード音楽院作曲科（14～15）の教授を務め、17～18年にはベルリン・フィルのカラヤン・アカデミーで指揮を教えた。20/21シーズンよりシンシナティ交響楽団のクリエイティブ・パートナーを務める。作品はすべてバーレーンライターから出版されている。[平野貴俊]

ひとりひとりがソリスト！音楽堂公演出演予定メンバー

Jeanne-Marie Conquer,
violin, EIC soloist **

Diégo Tosi, violin

John Stulz, viola

Éric-Maria Couturier, cello

Nicolas Crosse, contrabass

Sophie Cherrier, flute
Emmanuelle Ophèle, flute
Philippe Grauvogel, oboe

Paul Riveaux, bassoon

Jérôme Comte, clarinet

Martin Adámek, clarinet

Jens McManama, horn

Lucas Lipari-Mayer, trumpet

Jules Boittin, trombone

Gilles Durot, percussion *

Samuel Favre, percussion *

Dimitri Vassilakis, piano

Sébastien Vichard, piano

Valeria Kafelnikov, harp

[音楽堂ヘリテージ・コンサート特設サイトの](#) [音楽堂公演出演予定メンバー](#) から

ひとりずつのプロフィールや活動もご確認いただけます！*EIC オフィシャルサイトへリンクします フランス語、英語

参考資料

EIC いち押し！旬の作曲家アンナ・ソルヴァルズドットイルの Hírm（霜）

Anna THORVALDSDOTTIR: Hírm, pour ensemble について

リゲティが 1970 年に作曲した室内協奏曲では、ミクロポリフォニーの概念を極限まで高めています。リゲティは、滑らかで物憂げなポリフォニーと、小さくて速い無秩序な機械を交互に使用して、「ある種の秩序を持った、しかしどこか無秩序な秩序」をもたらしたいと考えました。この室内協奏曲は、瞬く間に現代レパートリーの「クラシック」となり、多くの作曲家にインスピレーションを与えました。例えば、アイスランドのアンナ・ソルヴァルズドットイルは、この曲に Hírm（アイスランド語で「韻を踏む」）と対になるものを与えたいと考えたのです。

EIC オフィシャルサイト 2020 年 1 月 19 日ディジョンのオペラ座における EIC のコンサート告知より

アンナ・ソルヴァルズドットイル: 自然、テクスチャー、構造。

「ビョーク以来のアイスランド音楽界の大物」アイスランドの作曲家アンナ・ソルヴァルズドットイルのフランス未発表作品「Hírm」と演奏しますが、ファイナンシャル・タイム紙は彼女のことをこのように評しています。音楽創造におけるライジング・スターのポートレイトをご紹介します。

ファイナンシャル・タイムズ紙は、アンナ・ソルヴァルズドットイルはビョーク以来のアイスランド音楽界の大物だと評しています。子供時代を山と海に挟まれた、レイキャビクの北に位置する海岸沿いの町ボルガルネースで過ごし、その後カリフォルニアで研鑽を積み、いくつかの主要な国際的な賞を受賞（2012 年ノルディック・カウンシル音楽賞、2015 年ニューヨーク・フィルハーモニックのクラビス・エマージング・コンポーザー賞）、そして名門レーベルであるドイツ・グラモフォンでの録音など、完璧なキャリアを築いています。

現在はロンドン近郊に住んでいますが、彼女の豊かで透明感のある音楽を聴いていると、故郷の島を思い出さずにはいられません。2017 年には、アンサンブル・アンテルコンタンポランから、天地創造の 7 日間をテーマにした 7 つの作品をまとめて制作する「創世記」（訳注：7 人の作曲家に創世記の 1 日ずつ作曲してもらうプロジェクト）のひとつを委嘱されました。この創立 40 周年記念のコンサートのために、彼女は、当然のごとく光の創造日である 4 日目を選び、「Illumine」というタイトルをつけました。指揮者アラン・ギルバートやエサ・ペッカ・サロネンの "愛弟子" の作品には、アイスランドの風景に特有の要素があります。突然の光の変化、力強い溶岩流、厳格な音の塊、1/4 音の曇ったテクスチャーなどです。オーガニック（有機的）な音楽、器乐的な色彩に包まれる壮大な作品です。

レイキャビクのダーク・デイズ音楽祭のディレクターである Gunnar Karel Masson 氏は、ソルヴァルズドットイルの音楽を「アンナの音楽には何か神秘的なものがある。まるで、素晴らしい家を建てるように、すべてが豪華に構成され、配置されているのに、屋根裏には怖いものが隠れているようなものです。」と見事に表現しています。作曲家は、「動く音の世界」を表現し、そこでは音のエコロジー（生態）を尊重し、とても叙情的な雰囲気を生み出します。作曲における重要なエピソードでは最初のジェスチャー、スケッチ、そしてそれが発展していきます。フランスのジェラルド・グリゼイやトリスタン・ミュライユなどのスペクトル楽派のアーティストのように、彼女は自然現象にインスピレーションを求め、その現象は緻密に構築され、印象的なプロセスで発展していきます。1 月 19 日にディジョンのオペラ座で演奏される「Hírm」（2010 年）では、氷の結晶のゆっくりとした成長から始まり、荘厳な音のタペストリーが作られ、14 の楽器によるうっとりするような光のステンドグラスのようです。リゲティの代表作である「室内協奏曲」との相性は抜群です。

テクスチャーと楽器の融合を愛する 40 歳の若き女性は、オーケストラを自分のお気に入りの楽器としています。最近の作品「メタコスモス」（ニューヨーク・フィルハーモニックが初演、ベルリンとサンフランシスコのオーケストラが演奏）では、この元チェリストは「ブラックホールに入る感覚」を表現することを目指し、「美と混沌」を組み合わせました。アンナ・ソルヴァルズドットイルの音楽とは、後戻りできなくなるまで道を辿り、「綱渡りの時に手にするこわれやすい花」のようなハーモニーとともに、道が私たちをこの先どこへ導くかを見るようです。彼女の音楽を「錯乱と形の同盟」と語ったジェラルド・グリゼイの言葉が思い出されます。アイスランドの作曲家は、綿密に考えられた形から出発して、未知の、錯乱した、幻の世界に到達します。彼女の音楽は、見た目は壊れやすいですが、私たちの心をなんと揺さぶることでしょう。

EIC オフィシャルサイトより Portrait Par Laurent Vilarem, le 2020 年 1 月 9 日 紹介記事

マエストロ ピンチャーも横浜という街によく合うと太鼓判！

ミケル・ウルキーザが語る「さえずる鳥たちとふりかえるフクロウ」とは？

音符の上の鳥のように。

2020年12月21日にシャトレ劇場で開催されるコンサートで、アンサンブル・アンテルコンタンポランは3つの新作を発表します。この模様は収録されライブ放送されます。中でも、ミケル・ウルキーザの作品は、今年の9月に開催される予定だった「In Between」という新しいコンサートのために作られたものです。「さえずる鳥たちとふりかえるフクロウ Oiseaux gazouillants et hibou qui se retourne」という不思議なタイトルのこの作品を聴く機会を待ちながら、自然と軽やかさを愛する若き作曲家をご紹介します。

ミケルさん、この不思議なタイトルの由来は何ですか？

「Oiseaux gazouillants et hibou qui se retourne」は、紀元前3世紀、ビザンティン帝国でギリシャの技師フィロによって作られた自動機械の名前です。この自動機械で私が感心したのは、非常にシンプルなやり方で洗練されたストーリーをあらわしていることです。フクロウの不穏な視線の下、3羽の鳥が沈黙しています。沈黙は死を暗示しています。無生物（ちなみに生命の源である水で動いている）がこの小さな劇場を演じることができているというのは、私には美しい矛盾に思えます。私の作品では、鳥とフクロウの交替が、ソロとトゥッティの対立に反映されています。最初は、トゥッティが沈黙しているときにしか感じられないソロですが、徐々に独自の対話を紡ぎ出し、最終的には聴くことのパラダイムを逆転させます。

タイトルに関しては、あなたの作品をすべて見ていくと、5つ以上の言語（バスク語、スペイン語、フランス語、ラテン語、英語、そして確かイタリア語）で書かれています。どのようにして選んでいるのですか？

ラテン語（これはローマ人の気まぐれ）を除けば、これらの言語は私が流暢に読んだり話したりできる言語です。私の作品のタイトルは、芸術作品に関係していることが多いです。私の源が多言語であるように、私のタイトルも同様です。

もともとこの作品は、アレクサンダー・ファヒマが企画・演出した「森の中の小屋」という特別なコンサートの一部として初演される予定でした。今回のコンサートにおける想像力の産物は、どのように作品に反映されているのでしょうか。

私はアレクサンダーの提案に魅了され、コンサートのプログラムにあう音楽を想像しました。いくつかの音の要素は森をあらわしています。鳥の鳴き声はもちろんのこと、特定の楽器奏者を隠したり（鳥が葉の裏に隠れているように）、差別化された音の平面を作ったり（場面を解体するために）することによってです。私はこの作品をメディチ荘で書きました。緑に囲まれた家（まさに「森の中の小屋」）で、鳥たちに囲まれていました。屋根にはカモメ、木にはオウム、中庭には孔雀、たくさんの黒鳥…。

どのような制約があり、それをどのように解決したのでしょうか。

制約は感じませんでした。アレクサンダーのアイディアは、私の想像力を刺激し、まだ使ったことのない仕掛けをするよう私の背中を押してくれました。私にとってコラボレーションとは、単に混ぜ合わせるのではなく、好奇心と開放感があれば、さらに進化することができます。

このような創造性に加えて、あなたの作品にはある種の「牧歌的」な魅力、あるいは少なくとも自然から借りたインスピレーションの一部が見られますが、それはどこから来ているのでしょうか？

私が書く作品は、共通のテーマ、親族関係や類似性でつながったネットワークを組み入れています。私のカタログの中で、おそらく最も「牧歌的」なタイトルを持つ「Belarretan（草の上）」は、実際にはティツィアーノの絵画を反映したものであり、「Las olas（波）」は、海についての作品であると同時に、ヴァージニア・ウルフの同名の小説についての作品でもあります。各タイトルは（少なくとも）2重の意味があります。私は芸術的な観点で、そして人間の発明品としての自然に興味があります。

鳥に関して言えば、あなたの音楽は全体的に「空気のような」質（飛行の軽さ、優雅さ、柔らかさからなる）が印象的ですが、それを求めているのでしょうか、またその理由は？

飛行も私の音楽のテーマのひとつですが（私がパリ音楽院の学生だったとき、アンサンブル・アンテルコンタンポランのソリストたちが、私の管楽器五重奏曲『Manual de vuelo del aeronauta inexperto』を初演しました）、あなたがおっしゃる「軽さ」は、私にとって大切な属性なので、もう少しお話ししたいと思います。私は、最も深遠で複雑なアイディアは、歓迎され、伝わりやすい音楽によって表現できると心から信じています。ではなぜこの質を否定する必要があるのでしょうか。

EIC オフィシャルサイトより INTERVIEW By Jérémie Szpirglas, 2020年12月16日

以上、アンサンブル・アンテルコンタンポランオフィシャルサイト <https://www.ensembleintercontemporain.com/> より 禁無断転載